

国芳の団扇絵 猫と歌舞伎とチャキチャキ娘

太田記念美術館（原宿）24.06.01～25 06.29～07.28 前後期で全展示替え



「歌川国芳」(1797～1861)は、多彩なジャンルで活躍し現代人にも人気の浮世絵師であるが、本展では史上初めて「国芳」の団扇絵だけの展示である。

「団扇」は、江戸っ子にとって夏の暑さをしのぐための必需品であったが、同時にデザインを楽しむお洒落のアイテムでもあり、また歌舞伎ファンにとって大事な推し活グッズでもあった。この団扇を作るための浮世絵師、すなわち団扇絵も実は人気が高く、画伯も積極的に手がけていたとされている。

本展では、「見てヨシ、推してヨシ、あおいでよし!」で、消耗品であることから現存数が少ないなか、初展示作品「約100点を含む220点」を紹介し、目にも楽しく涼しげな団扇絵の世界を楽しむことができる企画である。

歌川国芳 《団扇絵判錦絵》 1844(弘化元)年頃 上図のチラシ図

「国芳」は、猫好きとして知られ、家では十数匹の猫を飼い懐にも子猫を入れていたという。本作は、猫と戯れる黄八丈を着た美人娘が鏡に映った姿を猫にも見せようとしているが、無邪気な娘とは対照的に迷惑そうに嫌がる猫の表情が何とも言えない。娘の左手で握られた猫の指は少し開き、今にも爪でひっかきそうだ。絵柄を切り取って団扇に貼ると手鏡のように見える趣向である。



国芳 ^{つきづくし}《月尽の内 さえた月》1850年頃



国芳 ^{あいしょうかがみ}《逢性鏡》1830年

団扇絵の団扇という特殊な形の中に、より効果的に描くということに、絵師もこだわりをもったことであろう。従って、残された扇子絵には捨てがたい味のある作品が多いとされている。